

または一般教育の中で、行き場のない現状であり、今後の教育行政の中で、適切な方向を見出せるようにすべきであると述べた。

また、LDは、障害幼児の問題と関連して取りあげるべきであり、行政面では文部省だけではなく、医療との関係もあるので、厚生省の協力も必要である。

最後に、LDの問題については、今後どのように考えていくかは、学会で引き続き検討していくべき課題であると提案した。

上村は、医学的な立場からLDについて、次の2点にふれた。

LD児にみられる脳機能障害の本態は、その多くが微妙であり、この点で、MBDの概念と重なりあう。ただ、両者は診断の時限が異なるために、完全に一致するものではない。障害の質については、神経薬理学的な研究により、徐々に明らかにされつつあるが、なお学習過程のさまざまな障害を説明出来る段階ではなく、今後の研究がまたれる。

次に、LD児の医療については、治療教育があくまで主体であるが、医学的にも、薬剤療法、神経生理学的訓練、分子矯正療法などさまざまなものがあげられる。そ

の中で有効性が一般に認められているものは、薬剤療法で、特に中枢刺激剤（メチルフェニデート）は、LDの主症状の1つである多動に効果があると考えられている。

しかし、その実施に際しては、対象の選択、治療効果の確認などで、今後、各領域での学際的な協力が待たれる。

まとめと今後の課題

その他、検査の具体的な方法、MBDとLDとの関係、アメリカ以外のLDの現状、LDと、teaching disabilityの関係についての討議が行われた。

東は、LDの問題を教育心理学の立場から、どのような対応が出来るかを考えていかなければならないと提案し、teaching disabilityを克服するためにも、LDについての理解を他の領域と関連させながら深めていくべきであると指摘した。

LDは、これらの課題であり、その定義、用語の使用についても、各提案者の見解も異なり、今後の検討が必要である。と同時に、実際に、学習上に障害をもつ、LD児に対して、制度的には、何が適切であるかを検討していくべきであろう。

自主シンポジウムII：発達研究と現代社会

オーガナイザー	波多野 誼余夫 (独協大学)
司会者	内田 伸子 (お茶の水女子大学)
〃	横山 浩司 (和光大学)
提案者	山下 恒男 (茨城大学)
〃	波多野 誼余夫 (独協大学)
討論者	天野 清 (国立教育研究所)
〃	村井 潤一 (大阪教育大学)
〃	篠原 睦治 (和光大学)

このシンポジウムは、今回の提案者ともなっている山下恒男（茨城大）の著書「反発達論」の読書会を基盤として継続されてきた研究会によって企画されたものであった。その内容としては、山下の著書に主張されているような新たな視点と射程のもとに、『発達』概念の持つ社会的意味、『発達研究』と教育・臨床、『発達研究者』の「専門性」といった問題を、研究者それぞれの現場で、いやおうなく抱えこまざるをえない問題として相互確認すること、さらにそうした問題をのりこえる方途について議論を深めてゆくことが期待されていた。3時間という枠もあり、また研究者間の認識枠の隔りもかなり大きなものがあり、期待されていた内容が十分に展開され、

深められたとはいえないものであった。しかし、研究者個々人の研究の営みのサイクルの一環として、あるいは「学会」という、それ自体いやおうなく研究の総体を具現してしまう場の営みの一環として、こうした議論を企て、自らの営みを自ら点検してゆくことは、今日の肥大し、密接に社会現実と結びついた発達研究の現状にあっては、単に必要な作業であるだけでなく、いわば必然的な契機とさえいえるであろう。今回のシンポジウムが甚だ不十分な展開しか得なかったとすれば、それは必要性や必然性に欠けていたからではなく、むしろこうした企てが久しく研究者・学会レベルで失われていたからではないかとさえ思えるのである。むしろこれがたんなる杞憂であることを願いつつ、今後もこうした企てが、さまざまな研究的営みのレベルで持続されることを望むものである。

以上のシンポジウムの前後の脈絡をおさえたうえで、当日の主たる議論の内容について報告を行う。まず『発達』という抽象化の意味のとらえかえしを」と題した山下の提案、次に「認知（発達）研究のメタ認知」と題した波多野誼余夫（独協大）の提案をふりかえってみる。

1. 発達という抽象化の意味のとらえかえしを ——山下恒男の提案

(1) 現代社会における発達研究の意味の点検。

この意味を「近代化」の問題との関わりの中かでとらえる必要がある。政治・経済主導のハードな構造に附随するものとしての人材確保・労働力配分の問題が教育の中央集権化をうみ、そこでの能力主義・個人主義の競争激化をひきおこしている。また附随するもうひとつの側面としての分業化あるいは技術革新が、労働内容・生産形態さらには生活スタイルの変容をうみだし、大量の単能労働と都市化をもたらしている。今日の発達研究というものをこうした近代化の枠組の中かでとらえなければならない。

能力主義は単に弱者の切りすてであるのみでなく、エリート層の自己疎外をも同時に進行させている。山下は出発点として、この後者による自分の貧困化、不自由さの感じをもっている。

こうしたことから、はたして現代社会で全面発達は可能か、全面発達しなくとも良いではないか、という問題が出てくる。

このような考えに対して、発達研究というものを政治・経済に無理に結びつけようとしているといわれるが、そうではない。発達研究は、事実において、政治・経済と結びついているのである。それを確認し、自覚するかどうかの問題なのである。こうしたことを考えていると実証的研究の効率は落ちるであろう。今日の大量の研究はこの自覚を切断して成立しているのだ。

(2) 発達研究に内在する論理。

従来の発達研究は3つに分けられる。ひとつは、古い発達論、操作主義によるもので、これは社会適応的・生物的なものである。次はマルクス主義の全面発達論であり、他はピアジェの公理主義によるものである。山下の「反発達論」は古い発達論への批判にすぎない、という指摘はあたらない。古いものにも新しいものにも共通する論理がある。それは生産性効率第1主義の発達観と技術主義の傾向である。またピアジェもワロンも同様に、発達現象が理論をなぞってゆく、公理・公準を通してのみ発達が見えるという公理主義の宿命をおっている。マルクス主義の全面発達論についていえば、それはなぜあれほど人間の優越性を強調するのか。生まれただけでは人間でない、「人間になる」という考え、つまり動物との違いの大きいほど人間的であるという考えがある。これらはいずれも、その発達研究が近代化の枠組の中かにあることを示している。

こうした批判に対して、それは発達研究に人格論が欠如しているからだという反論がある。しかし人格論は、

約束された土地にすぎず、そうしたことを主張することの弊害の方が大きいといわざるをえない。

(3) 発達研究者は何のために研究するのか。こうした問題の提起の中かでは、子どもを放置しておいて良いのか、ということが問題になる。しかし一体、本当の「放置」などあるのだろうか、農業の3つの形態を例にとると、まず近代農法、これは古い発達論に対応する。次に有機農法、これは波多野らの主張に対応するかもしれない。そして最後に自然農法、これがわれわれの立場である。それは農業としては自己矛盾であるが、まさにそれが「放置」である。

われわれは生物の全体系の中での人間をどう考えるのか、というエコロジカルな考え方が必要であると考えている。つまり、基本的には、「生活」の論理の中で生活を変えてゆくことまで考えることが必要だということである。そうした必要性の中かで、発達論が、差別論・共同体論・生態論などとの結合をはかってゆくときに、発達論は変質してゆくであろう。波多野らとの共通点であるが、人間の文化差に気がついたうえで、もう1度、人間の基本的な生活のありかたは何か、そこから人間の普遍性を追求する必要がでてくるだろう。こうした主張は、一言にしていえば、生活の論理の中かでの適度な抽象化を、ということになる。

2. 認知（発達）研究のメタ認知

——波多野諠余夫の提案

(1) 認知（発達）研究者として行っていることは、designer と learner つまり発達主体との間で、発達目標が share されたと考えたとき、その share された発達目標を効果的に達成する環境操作もしくは授業の方略に関する情報を発見し、それを伝達することである。

ここで発達の目標というのは、learner が関心もち従事する活動領域において、もっとも高度な発達段階（形式的操作）ないしはこの領域における expertising をさす。また「share された」というのは、本人ないしはそれを代表する人間が desire するばかりでなく、designer の専門的立場からみてプラスの価値をもつことをさしている。何がプラスの価値であるかは難しいが、例えば自己実現化に役立つといったことが考えられる。

昔は教育心理学は不毛だなどといわれたが、今日では、こうした情報がないとは思えないし、またそれが効果的に用いられることはまちがいない。特に最近では、研究で用いられる tasks の ecological validity や instructional relevance が持たれなくてはならないことが強調されるようになってきていることも、こうしたことの現われである。

(2) 得られた情報が「悪用される」おそれは確かにあ

る。本人が desire しない発達目標がむりやりに達成させられたり、自己実現化にプラスにならない有能さを達成させるために使用されることがないとはいえない。むしろ、度々そのように使われているであろう。しかし、情報が公開されているかぎり、本人が desire しないことに使われる危険は小さいだろう。後者については、designer の自己点検も含めての絶えざる批判が必要である。

またこの情報の伝達に伴って、認知発達の可能性や促進・介入の意義が強調されすぎる危険もあるだろう。ひとつには、知的達成が中心になり、子どもの生活や社会・情動的発達が無視されてしまうこと、もうひとつには、ある領域で発達しないと、あるいはそう努力しないと肩身が狭い、といった暗黙の圧力がかかることである。ここでわれわれにできることは、各々の方のマイナスの効果をはっきりさせること、発達の目標は一人一人異なるものであることを明らかにすることであり、これは研究の水準でも必要であることであり、また伝達に際してもっと注意深くあるべきであろう。

(3) 逆に「発達しなくても良い」と主張すると、これはある意味では魅力ある思想であるが、本気でそう考えると体制に好都合となるだろう。一部の知的エリートを除く多数の学習者の発達の機会を奪うことになりかねない。とくに社会科学的知識の獲得なども抑圧されかねない。体制にとっては、一定数の専門労働者と多数の単純労働者があれば良いのであり、この生産性第一主義の立場からすれば、今の教育は return が悪く、「発達しなくても良い」といった方がはるかに return が良くなるであろう。

「全ての子どもに発達を」に対して体制は反対できず、いわばいやいやそれを受けているのである。この意味で、「発達」という概念ないしは「全ての子どもに全面的な発達を！」というスローガンが、近代社会の生産性第一主義への批判という側面をもつことを指摘しておきたい。

ある主張には必ずプラス・マイナスがある。プラスだけを見てマイナスを見ないことはまずいことであり、つねにどのようなマイナスがあるかに対して感受性を高めることは重要である。山下の主張はこの意味で貴重であるが、しかし、もしもその主張が dominant になるとすれば、それは「こわい日」だ。われわれは「発達」概念を抵抗のよりどころとして使ってきた歴史的意味を考える必要がある。

以上、山下・波多野両氏の提案が行われたのであるが、討論のかみ合う筋が見えにくく、内容的には相補的でもありながら、決定的な差異が大きすぎたかと思われる

る。その差異とは、山下が「近代化」の枠内で現代社会総体をとらえたのに対し、波多野は、いわゆる体制側とそれに抵抗する側の二分において現代社会をとらえていることである。それゆえ山下が「発達」概念をまずは「大人＝近代社会」によるところの「子ども＝自然」への抑圧的概念として把握し、「発達」＝「生産性第一主義で生きざるをえない大人化」として批判するのに対し、波多野は、発達目標を desire するという形で「自覚をもち」、share しあうという意味で「共同性・連帯性をもち」、そして体制を批判し抵抗する者としての「近代市民」イメージをうちだし、そうした人間への全面的発達を主張しているのである。

山下からすればこうした「近代市民」は「約束された土地」にすぎず、そうした主張はかえって現代社会の本性と「発達」概念の抑圧性を覆いかくしてしまうものと批判されるであろうし、また波多野からすれば山下の主張は社会的文脈においては、体制側にかえって免罪符を与えてしまい、生産性第一主義を推進する本体を見失わせるものとして批判されるであろう。

山下の主張が、古い発達論への批判にとどまらない「新しい」側面をもつのは、実はこうした人間・社会把握およびそれに沿っての科学批判の性質をもっているからである。それは従来の科学的成果の両刃性の指摘や悪用の監視といった議論の枠を越えようとする、いわゆる「反(近代)科学論」(それは主として自然科学と技術に向けられているが)との共通性を多く含んだものといえるであろう。後に報告する山下栄一(関西大)の議論は一層明確にこの意味での山下の主張をまとめているし、また天野清(国教研)は、ある意味で一層明確に近代科学の擁護すべき本性を発展させるという立場をうちだしているといえよう。

ともかく両氏の提案は、こうした今日の科学と社会が抱える、もっとも severe な問題をはらんだものであり、どのような立場に立とうとも、学会においてこうした議論が展開されたこと自体は、今日の実証主義・業績主義・専門化の進みすぎた状況において、評価すべきこととして良いであろう。

次に、これらの提案を受けて、指定討論者であった天野清(国教研)・村井潤一(大阪教育大)・篠原睦治(和光大)の議論およびフロアーからの発言の内容を簡単に報告しておく。

3. 討 論

(1) 天野清「現代の発達研究についての山下の指摘に同意しながら、科学としての発達理論の展開は、近代社会の政治・経済とプラクティカルに結びついた側面のみではなく、高度に哲学的な問題と結合した、人間の高次

精神機能の発生の研究でもある。そうしたものが、人間の能力・知能の見かたの新たな展開となり、科学の本来の使命としての、ドグマや迷信からの人間解放を行ってゆく流れとなっていることが認められるだろう。

こうした成果が、社会的に利用されてきている側面はたしかに存在する。例えば価値のない知能テストもそうだが、それは人間の能力研究の貧しさと結びついて出てきている。われわれはそれを越えるような能力把握をしなければならぬ。学問研究の貧弱さが誤った利用を産みだしているのではないか。その意味で、より正しい研究を行うとともに、誤った利用に対する監視も必要であろう。」

(2) 村井潤一「山下の話は、問題点を整理しすぎているのではないか。発達心理学はそんなに立派なものではなく、もっとモタついている。何故研究するのか、といわれれば、理念も求めているが、また食うためでもある。山下の話の中で「価値」の問題が出てくる。私は、価値の確定と不確定の矛盾として人間をとらえる。従来の発達研究が、その確定した部分のみをとらえようとしたのは事実だが、不確定さをとらえることが必要であると考えている。そこに発達心理学者の苦しみもある。

波多野の話は、割り切りすぎていてさびしい。発達の問題は、一方では哲学的問題でもあるが、他方、具体的な問題から出発している。例えばコトバの出ない子どもに対処してゆくといった場合、これが能力主義になるのかどうか。もちろんそれを、社会との関わりの中で考えてゆくことは大切であろう。

研究には、つねにイデオロギーが関係してくるが、それを内面に置き、反省しながらゆくことが必要であろう。

人間は社会的存在であるが、社会の直接的影響を受けてだけ育つわけではない。そこに人間の不確定さや自立性という重要な問題があるのだ。」

(3) 篠原睦治 歩くという課題を立てられ、「見込まれ」つづけ、また本人も「大学に行くために歩きたい」と願いつつリハビリを受けてきた身障者が、車イスで受入れる大学に出会って、歩くことを捨てたというケースを報告した後に、『見込まれた』者はリハビリ施設に隔離され、『見込まれなかった』者はそこからさえ排除される事実。17才で『みともない』恰好で歩けても、年齢に応じたスタイルでないことによって、審美的差別を受けるという事実。そうしたことを含みながらこの青年が、自らも歩くことを desire していたという事実。これから、波多野のいう shared された発達目標を達成するという以前に、その shared された目標といわれるものが実際にどう生みだされているのかを考えなくてはな

らない。歩くこと、発達がイコール善であるというドグマが、抑圧的になっていることに気づかねばならない。

歩けない、できない、という現実を障害者と共に引受けながら、人間の多様性と相互性の保証された社会を望まないわけにはゆかない。」と述べた。

(4) 山下栄一（関西大）「天野のいう、迷信などからの解放としての近代科学は、その役割をすでに果たし終っており、むしろ理念の衣で人間の自然を覆いつくすという弊害が強くなっている。心理学においては、単なる研究対象として人間を扱ってはならない。山下（恒）も否定してはいない発達の事実を執拗にみつめてゆくと、概念化しきれないものが見えてくる。それを近代科学の方法で抽象化すると、必ずそこから落ちる人間が出てくるのではないか。それゆえわれわれは、研究の意味づけを変え、新たな方法を考えてゆかねばならない。」

(5) 岩井勇児（愛知教育大）「majority の学習したいものと minority のそれとはつながってはならず、矛盾したものである。山下（恒）も波多野もそこをつながったもののように見ているのではないか。」

(6) 佐々木宏子（祇園寺短大）「現代社会における発達研究であるならば、男女の分業化の問題を内在させて考えねばならない。今日の発達研究には母子関係に枠を定めたものが多いが、そうした結果、つねに不利な立場に立たされるのは母親・女性である。山下（恒）の発達論の前提となる話には賛成だが、この男女の分業の問題も落とさないで考えてゆかねばならないはずだ。」

(7) 金田利子（静岡大）「今日の発達構造論は、総合的・全体的に生活者としての人間を見てゆくところまで来ている。篠原の話にあるものは、結局、発達主体の把握が足りないのではないか。」

以上のような発言を含みながら、討論が行われたが、その主要な軸は次のようなところにあったといえよう。

①近代科学の評価をめぐる軸。これは近代科学の抽象化・概念化（今回問題とされたのは「発達」という概念であるわけだが）の方法が、必ずそこから欠落する人間をつくりだし、抑圧的になってゆくのだという立場と、より精密な、より総合的な科学的把握によってそうした欠落を免れ、問題の窮極的解決に向かうことができるという立場に二分されるだろう。しかしいずれにしても、人と人との生きた出会いのもつ具体的総体性を内に保ちつづける、山下（恒）のいう「適度な抽象化」をめざさなければ、人は他の人間とまっとうな再度の出会いを失ってしまうであろう。

②それにしても、すでに現実社会の中で「生きたまっとうな出会い」を断ち切られている、健常者—障害者、男—女、大人—子ども、majority—minority といった

差別的構造を、どのように自覚的に研究にとりこみ、そののりこえを企てようとするのか、これらをめぐって討論の第2の軸があったであろう。これについては、やはりその構造自体への自覚という点で、かなり不足があるのではないかと思われた。今日の発達研究の全体についても、また個々の研究者のとりくんでいる課題においても、つねにこれらへの反省と自覚が試みられなければ、われわれは「断ち切られた」関係のままに人間を見るといふ誤りから免れることはできないであろう。

③ 研究者・専門家と現実社会とのつながりをめぐる軸。いうまでもなくこれは①②とも内的に連関した問題であるが、一方で、科学が信仰にも似た位置をもち、専門家への期待が肥大化している現状批判や、専門家にかえて見えにくくなっている人間の価値の問題を考えようとする立場と、他方、専門家としての期待に応じられない科学の貧しさ・未熟さを指摘し、より高い科学の発展に努力しようとする立場とに二分されるかもしれな

い。いずれにしても専門家が自己を批判する契機はもっているのだが、それをどのような方向に向けようとしているのかにおいては、かなり異なったものを含んでいるといえよう。

こうした討論の結果、何ら一定のコンセンサスが得られたわけではない。むしろ、今日の発達研究者間の溝は、かなり深く、また多岐にわたっていることが見えてきたといっても良いかもしれない。ただ今回のシンポジウムでは、議論の水準がかなり抽象的であり、各々のdata baseの違いが大きすぎたことも関係しているのだから、「現実の子どもの成長に関わる、焦点を絞った議論」(村井の発言)をしつつ、こうしたテーマの具体的研究への内在化をはかることが今後、必要であろうと思われる。それは単に、新たなシンポジウムを企画するというのではなく、個別の研究発表についての討論の場へも、今回の議論のモチーフをもちこんでゆくということでもであろう。(文責・横山)

自主シンポジウムⅢ：教育心理学研究におけるコンピュータ利用のあり方

企画・司会者 石 桁 正 士 (大阪電気通信大学)
 企画・話題提供者 岡 本 敏 雄 (金沢工業大学)
 話題提供者 後 藤 忠 彦 (岐阜大学)
 野 嶋 栄一郎 (国立教育研究所)
 永 野 和 男 (京都教育大学)
 討 論 者 菅 井 勝 雄 (茨城大学)
 柴 若 光 昭 (東京大学)
 石 原 敏 道 (山形大学)

〔1〕 シンポジウムのねらい

このシンポジウムを企画したねらいの1つは、教育心理学研究の中でコンピュータ利用の分野の概括とその具体的なシステム形態の探索である。したがって、まず現状がどのようなものであるか考察したい。

教育心理学の研究のスタイルは、心理学の研究のスタイルをモデルとし、さらに心理学の研究のスタイルは科学、とりわけ生物学の研究のスタイルをモデルとしてきた。そして、その研究のスタイルは、実験計画法に基づく仮説検証型の実験的アプローチと法則発見型の観察的アプローチであった。これらのアプローチから産出されるものは、いわゆる人間の心理や行動のある条件下(環境下)における原理や法則であった。

言い換えれば研究において原理や法則を見出すことが最大の目的であった。それ故、コンピュータ利用といった立場から研究方法を見たとき、統計処理という1つの

固定的なパターンが出来あがってしまい、コンピュータは単に計算する機械であったように思われる。

このような傾向は、今後、因子分析をはじめとし、多変量解析の手段としてますます増大していくであろうと思われる。

一方コンピュータ・サイエンスやソフトウェア工学から研究方法を見たとき、教育心理学におけるコンピュータ利用はあまりにも偏狭なものにしてしまっているように思われる。そこで教育心理学の目的すなわち学問的ねらいと社会的使命をもう1度見直せば、少なくともコンピュータ利用の研究方法を多面的に思考することが重要であるといえる。

上述の教育心理学の目的が、教育の中の心理的な諸法則の解明と、同時に教育の中に存在する種々の問題の解決技法の確立と、さらによりよい心理的教育環境の設計にあるとするならば、従来の研究方法ではこれらの目的を達成することはきわめて困難ではないかと恐れる。そこでコンピュータ利用において「結果を処理すること」だけでなく、仮説となるべき「心理的教育環境の設計を処理すること」も必要になってくると考えるのは当然なことであろう。

このような問題意識から、このシンポジウムでは次の4つの具体的なねらいが設定された。

①教育心理学研究の中でコンピュータを積極的に利用したり、また利用する分野を探索したり、拡大するこ

VOLUNTARILY ORGANIZED SYMPOSIUM II

MODERN SOCIETY AND THE STUDY OF HUMAN DEVELOPMENT

Organizer :	Giyoo Hatano	(Dokkyo University)
Chairmen :	Nobuko Uchida	(Ochanomizu Women's University)
	Koji Yokoyama	(Wako University)
Reviewers :	Tsuneo Yamashita	(Ibaraki University)
	Giyoo Hatano	(Dokkyo University)
Symposists :	Kiyoshi Amano	(National Institute for Educational Research)
	Junichi Murai	(Osaka University of Education)
	Mutsuharu Shinohara	(Wako University)

In this symposium, the propositions and arguments were discussed on the three axes as follows :

(1) The evaluation of modern science :

The first view point was that the methods of abstraction and conceptualization in the modern science, repressed some people who dropped out of those methods. The second was that the formation of synthetic science will correct those defects and solve the final problems.

(2) The discriminatory social structure :

We should emphasize the awareness of the discriminatory social structure ; for example, adult—

infant, the not-handicapped—the handicapped, man—woman, majority—minority.

(3) The relations between researchers or professionals and real society :

The first argument criticized the situation that the modern science had changed into religion, and that the expectation to professionals' work had been enlarged. The another one pointed out that the professionals could not meet the expectation because of the low level of modern science ; therefore, we should make efforts to bring science up to a higher level.

VOLUNTARILY ORGANIZED SYMPOSIUM III

HOW TO UTILIZE A COMPUTER IN THE RESEARCH OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY

Organizer and Chairman :	Tadashi Ishiketa	(Osaka Electro-Communication University)
Coordinator and Speaker :	Toshio Okamoto	(Kanazawa Institute of Technology)
Speakers :	Tadahiko Gotoh	(Gifu University)
	Ei-ichiro Nojima	(National Institute for Educational Research)
	Kazuo Nagano	(Kyoto University of Education)
Discussants:	Katsuo Sugai	(Ibaragi University)
	Teruaki Shibawaka	(University of Tokyo)
	Toshimichi Ishihara	(Yamagata University)

Recently a few researchers on the educational psychology have used the computer in their works, but it seems to the organizer and the coordinator

that the phase of computer utilization is limited.

This symposium had four aims. The first one was to review the trend of studies using the comp-